

川崎支部便り 第 62 号 (2023 年 03 月)

オープンで各自が主役：川崎支部

川崎支部支部長 山岸一雄 (執筆：河合・山岸))

人生を豊かに(雑学のすすめ)

【究極の食いてい魚】

魚市場で「おかず」と言えば自家用の商品で、自分の口に入る分です。売り物は「総菜物」との線引きが有ります。市場の仕事が終わり、マグロの切れっぱしを来る日も来る日も、飽きるくらいに食べ込みます。そうするうちに、モノの正体が見え、目利きになっていきます。「魚は、食わなきゃわからねえ」。目が寸でいるとかウロコが輝いているとか、一般に美味しい魚の見分け方が有りますが、それ以上に市場人の誰もが言う究極の見分け方は、「うまそ、食いてえ」。おかずが養った直観こそが勝負なのです。

川崎点描：川崎支部活動拠点

【「忠臣蔵・赤穂事件」と「縁（ゆかり）」がある川崎市⑮－謎の深堀り】

○泉岳寺と赤穂浅野家との関係は？

泉岳寺は徳川家康が、1612年（慶長17年）に門庵宗関和尚（もんなんそうかん・今川義元の孫）に拝請（はいしょう・つつしんでお願いすること）して、外桜田の地に創建した寺院でした。しかし、1641年（寛永18年）の寛永の大火で焼失してしまいました。そのため、第3代将軍家光の命で、毛利氏・浅野氏・朽木氏（くつきし）・丹羽氏・水谷氏の5大名に現在の高輪の地に再建させました。浅野家はこの時から泉岳寺との付き合いが始まりました。

泉岳寺は曹洞宗江戸三か寺（えどさんかじ）（註1）及び三学寮の一つとして名を馳せていました。曹洞宗の本山は2つあり、1つは道元禅師が開いた福井県の「永平寺」で、もう1つは横浜鶴見の「総持寺」です。総持寺には大スターであった石原裕次郎のお墓があります。1999年（平成11年）7月に営まれた石原裕次郎13回忌法要には、実に20万人近い参列者がお参りしたそうです。

*（註1）江戸三か寺：江戸府内の曹洞宗の寺院を管理・監督する3か所の寺院。總泉寺（そうせんじ・板橋区）、青松寺（港区愛宕）、泉岳寺（港区高輪）。

○大石内蔵助は松の大廊下事件後、何故京都山科に隠棲したのか？

大石内蔵助は赤穂藩浅野家の筆頭家老として、現在の兵庫県赤穂市上仮屋旧城内にある屋敷に大石の一家3代が57年間に渡り住んだ屋敷がありました。1701年（元禄14年）の松の大廊下での刃傷の悲報を伝えた早飛脚が到着したのもこの屋敷でした（現在国の史跡に指定）。赤穂藩取り潰しになった時点で、藩士達は（浪人）「身分保障」が無くなります。特に筆頭家老の大石等は身元保証が失われ、大変な思いをしたとおもいます。

大石の母方の親戚に、京都の来迎院（らいごういん・皇室の菩提寺の泉涌寺（せんゆうじ）の塔頭の住職の卓巖（たくがん）和尚が山科の住居を保証し、来迎院で「寺請証文」（てらうけしょうもん・現在の戸籍に相当、身分を保証）を発行してもらい、来迎院に近い山科で居を構えました。塔頭（たちちゅう）とは禅宗寺院で祖師や門徒高僧の死後、その弟子がその徳を慕って大寺、名利に寄り添って建てた塔、庵や小院です。この山科の住居跡には「岩屋寺」が現在もあり、「大石寺（おおいしてら）」とも呼ばれています。大石はここから来迎院に向かい、ここに祀られている「勝軍地藏大

菩薩」（しょうぐんじぞうだいぼさつ・戦いに勝って飢饉等を逃れると言われ、室町時代以降に武家に信仰された）に仇討ちの成功を祈願したと言われていています。はたしてその真実はいかに・・・。
大石は京都山科に、吉良仇討ちまでの1年9か月の内約1年半をここで過ごしています。何故か？

大石内蔵助の第1の目的は、浅野家の再興でした。浅野家藩士300名、足輕は800名いたそうですが、筆頭家老として責任を考えていたのでしょう。大石は幕府の処分を不服と訴えていましたが、覆ることは有りませんでした。

大石は京都の人脈を活用したのです。その1は遠い縁戚の近衛家から幕府へ「**お家再興**」の根回し。その2は来迎院の仏教関係からのお家再興の働きかけ、その3は第5代將軍徳川綱吉の母桂昌院が京都出身で、綱吉の政策を支えた真言宗の僧侶で生類憐みの令の発案者である護持院隆光（ごじいんりゅうこう）に帰依していたことを頼り、お家再興が出来る様に働きかけをしました。大石の京都での約1年半は、御家再興のための**積極的な根回し**をしていたのです。

一方、大石は武門だけでなく、大石の人柄が見えるものが来迎院に残っています。それは大石自ら書いた掛け軸の「**翡翠の図**」（かわせみのず）で、粹人として的人格が有り、遊び心もあり、ここが大石の持っていた「余裕」です。広い視野を持つての行動が、赤穂事件での重要な点と考えます。更に、来迎院に大石が寄進したのが**茶室「含翠軒（がんすいけん）」**です。粹人である大石達の茶の嗜みもありますが、茶室を作った理由の一つは、泉涌寺は皇室の菩提寺であり「一般人は入山禁止」です。泉涌寺の塔頭である来迎院も一般人は入れず、**茶室は「密談」**にうってつけの場所で、打合せのテーマはお家再興であったと思います。また、息抜きの為か仇討ちを考えている人々を油断させる為か、「芸者遊び」もしていますが、茶室造り・遊びの費用は、**すべて大石個人で負担**しています。

過去にもお家取り潰しの大名家が有りましたが、石高が1/3位になり、「名跡相続」の考えでお家再興の例があったのです。今回は刃傷事件なので、お家再興の確率は大変低いかもしれませんが、浅野内匠頭の弟の大学が処分保留だったので、大石は低確率でも「お家再興」にかけ、必死の努力をしていたのです。

（参考）当時のお金の額は現在ではいくら？

大石が仇討ちまでに使用した金額

金1両・・・12万円、金1分・・・3万円、金1朱・・・7000円、銀1匁・・・200円、
銀1文・・・30円、金大判・・・120万円（1両の10倍）

○仇討ちまで1年9か月を要したのは何故？

当時「仇討ち」は幕府公認で「**仇討ちのルール**」が定められ、奉行所に届けを出して「仇討許可証」を受取ります。仇を見つけたら、現地の奉行所に届けを出すことで仇討ちが出来ました。また、「**重仇討ちの禁**」があり、「仇討ちに対する仇討ちをしない」決まりです。前の許可がある仇討ちであれば、討ったほうは重仇討ちを受けないで、堂々と生きていけました。今回の「赤穂事件」は浅野内匠頭に切腹をさせたのは幕府で、一般の仇討ちとは異なります。今回の仇討ちは幕府が出した裁定に異議ありとなり、「国家反逆罪」となってしまう家族たちも処刑される可能性が有ります。一般の仇討ちとは異なり、大石は当然このことは知っていたはずで

江戸の仇討ちを進める急進派をなだめながら「お家再興の推進工作」を進めてきた大石も、1702年（元禄15年）7月18日**浅野大学を本家広島藩にお預け**の幕府決定を受け、同年7月28日の京都円山会議で「お家再興」は断念して「仇討ち」を決心しました。この時が仇討ちを決行した1702年（元禄15年）12月14日の約5か月前でした。江戸城内の松の大廊下の刃傷沙汰、そして浅野内匠頭の切腹

から1年5か月が経過しています。筆者もサラリーマン時代に、責任者として多くの厳しい建設工事に携わって来ましたが、部下はもとより多くの人の意見を聞いて最終決断は筆者が行い、良い結果は皆で分かち合い、失敗は筆者が取ってきました。

大石は「昼行燈」と言われていましたが、粋人であり遊び心もあり、**広い視野**を持ち、物事の**先を良く見据え**られる人格者であったことは前にも紹介しました。大石は浪士達の生活の苦しさを知りながら、お家再興か討入りか、本人の心の中の葛藤と戦い、元筆頭家老であった大石の心の中はどの様であったでしょう。しかし、大石は討入りと決定したからには絶対に成功させなくてはならないとの強い決心があったと思います。

江戸町民達も討入りを望んでいたと思うし、特に吉良家や上杉家が討入りに対する用心をすると皆様も思うのではないのでしょうか。討入りの時期を延ばすことで、人々に仇討ちはないと思わせることが大事であり、「お家再興工作と赤穂浪士の記憶を江戸の人々から消すための期間」でもあったのでした。前に述べた筆者の社会人時代の気持ちと比べられない以上のプレッシャーやストレスが大石にあったと想像します。

○仇討ち決行から幕府の切腹の裁定が出るまで2か月かかったのは何故？

今回の赤穂浪士の討入りは、幕府に対する裁定に対する異議でしたが、江戸町民はじめ全国で浪士達を讃えて人気があり主君の仇を討った「義士」であり、見事な「武士道」なので殺すなどの話題が出る一方、幕府側としては幕府に対する異議の「謀反（むほん）」であるので、幕府は学者や幕府内の様々な意見もあり、その結果、時の将軍徳川綱吉は**上野輪王寺宮**（日光・上野の輪王寺の門跡（註2））の門跡（註1）となる**公弁法親王**（こうべんほっしんのう・第111代後西（ごさい）天皇の第6皇子）に相談し、武士としての輝かしく、美しく、彼らにとって幸せな死にざまは、名誉ある刑である切腹が一番ふさわしいとの結論でした。この様に幕府も大変な悩んだ末に、**切腹の沙汰まで約2か月**を要しました。

*（註2）門跡：皇族・貴族の出身者が住持する特定の寺院。また、その寺院の住職。法門を受継ぎ講義を伝えている僧。

○京都で見つかった新しい赤穂事件の資料とは？

2016年（平成26年）の末、本願寺より発表された資料「**江戸江遺書状留帳**（えどえつかわすしよじょうのとどめちょう）」で全国の本願寺派寺院と京都大本山の西本願寺との手紙のやり取りを記録したものです。その中で大本山西本願寺と江戸の築地本願寺との手紙のやり取りを記録した中に、赤穂事件の資料があったのです。**この記録は今までの他の赤穂事件の資料との違い**があるのです。

いままでの資料は、全てではありませんが事件後の何年か何十年後に書かれたものが多い様です。しかし今回の資料は事件後からリアルタイムの情報を伝える手紙だったそうです。例えば、松の大廊下の刃傷事件が発生した当日1701年（元禄14年）3月14日の日付の手紙が京都西本願寺に届き、「江戸城で浅野内匠頭が吉良上野介に不慮の出来事が起きたこと」の手紙ですが、その内容やその後のことは書かれていません。3月15日付の手紙には「**吉良氏は多くの痛みはなく、食事も取っている**。そして浅野内匠頭が「乱心した」と書かれていますが、詳細は書かれていない手紙で、西本願寺派詳細が知りたい旨の返信を出しています。この手紙は事件を最も早く伝えたものでした。

何故本願寺が吉良上野介のことを知らせたのか、吉良と本願寺との関係は何か？ 皆様もご存じの築地本願寺は、最初は江戸日本橋にありましたが、江戸の大半を襲った1657年（明暦3年）1月18

日～20日の「明暦の大火」で焼失しました。この年の干支（えと）から「丁酉火事（ひのとりのかじ）」、出火の状況から「振袖火事（ふりそでかじ）」、火元の地名から「円山火事（まるやまかじ）」とも呼ばれた大火です。「明暦の大火」「明和の大火」（1772年（明和9年）2月29日）、「文化の大火」（1806年（文化3年）3月4日）を「江戸3大火」と言われています。

本題に戻ると、この明暦の大火で焼失した時に本願寺は現在の築地に移転しました。この時に吉良家が築地本願寺の移転先の土地を幕府と掛け合い、確保したのが高家吉良家でした。江戸城内の松の大廊下事件から約45年も前に吉良家と本願寺との付合いがあり、恩義がある本願寺はすぐに吉良家のことを知らせる手紙を出したのは当然と思います。

歴史案内人として有名な梶本晃司氏の解説は、本願寺遺書状留帳に記載されている「乱心」とは、高家吉良家側からみると、家の格差が「月とすっぽん」ほどあり、浅野内匠頭は高家吉良上野介から言われることに、もともとの家の格差からのコンプレックスによる積年の思いが「乱心」となり、行動に至ったとして、吉良側は一切身に覚えがないのに切りつけられたと言っています。筆者の公平な目で見ると、高家の力で大名を自分の意に従わせる理不尽な言動が吉良側にあったのではないかと思います。現代でも上司に逆らうと良いことはない、筆者の経験からも思い当たります。西本願寺の資料から、更に新事実の発見を期待します。

○高輪泉岳寺の47士の墓石が、48士分あるのは何故？

赤穂浪士たちの吉良邸討入りの最終人数は47士で、墓石は47基と思う方が多いと思います。実は48基あります。仇討ち後に泉岳寺に向かっている途中で、寺坂吉右衛門が隊列を離れて行先不明になったことは、以前に説明しました。当然寺坂は切腹をしていますが、大石以下46名の切腹をした数か月後、寺坂は大目付役の仙石伯耆守久尚に自首したところ放免され、83歳まで生きて赤穂浪士の家族達を見守っていったと思います。

慶応年間に入って寺坂の墓石が建てられました。寺坂は討入りに参加し、大石の密命を受けた47士の一人です。しかし仇討ちに参加していない萱野三平は、主君浅野内匠頭が江戸城の松の大廊下での刃傷事件を早水藤左衛門と早駕籠での第一報を赤穂へもたらした人物でした。そして討入りの起請文に加わりましたが、父親の意向で実家を継いで欲しいと言われ、「踏み止まれば忠ならず、江戸へ下れば孝ならず」との板挟みに苦しみ、1702年（元禄15年）1月15日に切腹し自害しました。大石も萱野の意思をくみ、討入りの時に大石は萱野三平の名前を書いた短冊を槍先にくくってたとか、誰かが萱野の遺書を懐に入れて討入りしたとの話もあるそうです。

泉岳寺の赤穂浪士の墓石には、「刃○○劔信士」とされ、「討入りで、刃で主君の仇を討ち、刃で自決した生き様を表現」し、敬意をもって戒名を同じ様にしたのではないかとのことです。萱野三平も討入り同士として、同じ戒名で祀られているのです。大石内蔵助や吉田忠左衛門から密命を受けた浪士の家族への伝達者の寺坂（本来は討入りに参加）の戒名は「遂道退身信士」ですが、当時は行先不明なので逃亡と見られていたことは大変残念です。上に述べた様に、討入りしたが切腹出来なかった寺坂と、討入りに参加出来なかった萱野とで48基の墓石があるのです。

○「不忠」家老と言われた大野九郎兵衛は、本当は「忠臣」家老だった？

1701年（元禄14年）3月14日に江戸城内で赤穂藩主浅野内匠頭と吉良上野介との刃傷事件は、即日内匠頭の切腹、お家取り潰しと、大変慌ただしい短期間での幕府からの沙汰でした。現在で言えば、企業の社長が突然死亡して会社が無くなる様な事件で、従業員（家臣）達のことを考えると大変な事態だと思います。

事件発生後、赤穂藩赤穂城で、同年3月27日～29日の間、藩士総登城をして筆頭家老大石内蔵助を上座に、大評定（会議）が行われました。この時代は藩士が300名、足軽が800名居たと言われていますが、赤穂城内に300名が一同に入れる空間があったのか疑問の資料がありますし、江戸詰め藩士の全員が出席したとの記録がありません。評定に出席したのは、当時の4家老以下で、現代での役職者レベルの人達で行われたのではないかと考えます。

- ① 筆頭家老：大石内蔵助良雄 石高1500石 赤穂藩の副社長でお家再興に努力したが叶わないで、主君の無念を晴らす仇討ちを成功させた忠臣の家老。
- ② 上席家老：藤井彦衛門宗茂 石高800石 大石筆頭家老に次ぐ家老。今回の主君内匠頭の勅使御馳走役の補佐をした一人だったが、失敗をした家老です。お家改易後は安井彦右衛門江戸家老と築地飯田町（現在の中央区築地7丁目東部辺り）に、安井彦右衛門江戸家老と浅野家江戸屋敷の近くに住んでいました。堀部安兵衛から仇討ちの参加を求められましたが、加わりませんでした。その後は知り合いの越中国富山藩前田家の家臣である金森八三衛門を頼り、越中国射水（いずみ）郡小杉村で、藤井左門として生活していました。1733年（享保18年）8月22日に姫路の網（あみ）干で死去したとされています。世間では「不忠臣」と見られていました。
- ③ 江戸家老：安井彦右衛門 石高650石 浅野家改易後、藤井又左衛門宗茂と同様に浅野家江戸屋敷の近くの築地飯田町に、前に述べた藤井上席家老や早川定助（浅野藩大目付）達と暮らしていました。安井も御馳走役である主君の補佐役を失敗した家老でした。

江戸急進派の堀部安兵衛は安井家老を仇討ちの盟主（仲間の中で中心となる人）に仰ごうとしましたが、彦右衛門の態度が曖昧で堀部安兵衛の怒りを買いました。討入り後に浪士達が引き上げた泉岳寺を訪れて面会を申し出ましたが、浪士達に追い返されてその後は不明になりました。江戸家老であり、浪士達からの要望を受け入れられない人物として、赤穂藩士達から見ると「大不忠臣」と見られてもしかたがない人物です。

- ④ 末席家老：大野九郎兵衛知房 石高650石 最後の4人目の家老大野九郎兵衛は赤穂藩の財政運営と塩田開発に手腕を発揮し、その手腕を認められて家老にとりたてられました。刃傷事件時はかなりの高齢であった様です。この時42～43歳であった大石筆頭家老は、大野は「叩（たた）き上げ」人生で家老になった人物だったのでしょう。赤穂藩番頭の伊藤五右衛門は、彼の弟と言われています。

事件後の赤穂城での大評定では、恭順開城論を唱える大野と、籠城を主張する大石派の家臣達との対立、家臣達への分配金（退職金）に関しても、大石の微禄の者にこそ手厚く配分の考えに対し、大野は石高に応じての配分での対立があり、大石は小役人達の改易に乗じての悪行に対して厳しく接し、藩士達との対立が有った様です。

大評定後の4月12日の夜、大野末席家老は子供の大野群右衛門と家財を置いたままで、更にかなり慌てていたのか、幼い孫娘を屋敷に残したまま逃げてしまいました。何故この様な行動をとったのか不思議です。このため大野は赤穂藩士の物語では嫌われ者になりました。その後の一説では、大野は不遇のまま人の施しを受けながら京都仁和寺の門前近くで暮らし、困窮のなかで生涯を閉じたとも言われています。

1748年（寛延元年）12月に大阪竹本座で歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」が初演されました。吉良邸討入りから約46年後のことです。上の竹本座より8年早い1740年（元文5年）の江戸市村座で

赤穂事件を題材とした豊年永代蔵が上演されているそうですが、話題にならなかったのでしょうか。この「仮名手本忠臣蔵」で大野は斧（おの）九太郎という悪役で登場します。

ところが全く別の説も有ります。大野が大評定で大石と仲違いをして赤穂を出奔したのは、大石と示し合わせた上でのことで、もし大石率いる浪士達が討入りに失敗して吉良を討ち逃がした時に、大野が第二の討ち手になる計画だったとの説も有ります。しかしこの時討入りは決定ではないので、別な理由があったのでしょうか。山形県五色温泉に近い「板谷峠」には16基の石碑が建っています。



(出典：Yahoo Japan)

板谷峠を超えると米沢に行きます。米沢の上杉家の当主綱憲は吉良上野介の長男を養子に出し、上杉家の存続に協力しています。もし大石が討入りに失敗すれば、吉良は息子を頼って米沢に来るであろうと予想し、その時は板谷峠を通る可能性が高いので、大野らはこの峠の付近に身を潜めて監視を続けていたそうです。ところがそこへ討ち入り成功の知らせが入り、第二の討ち手である大野達は不要になりました。討ち入り成功の情報は、泉岳寺に引上げる途中に行方不明になった寺坂吉右衛門が大石からの伝言で、討ち入りが成功したので「生き延びよ」と大野家老に伝えさせたと筆者は考えます。しかし、大野家老以下の第二予備軍は大石達への幕府の対応を見て追随したと筆者は思います。

世間には「不忠臣」とされ、日の目を見ることは有りませんでした。大野達は本懐成就を喜び全員が潔く自刃（じじん）を遂げました。赤穂城内での大評定で退席した時、大野他10名とされていますので、大野に同調する藩士達6名を説得し、この者達を加えた16基の石碑が理解出来ます。その上、住まいが大石も京都山科と、大野も京都仁和寺近くなので、相互に情報の交換は十分出来たと想像します。

この板谷峠の石碑は大野のものと伝えられ、佐藤という米沢の旅籠屋で浅野家と縁があった家が供養碑を建てたと言われています。以前に大野は仁和寺の門前近くで暮らし、困窮の中で死亡と紹介しましたが、1703年（元禄16年）4月に伊藤東涯（江戸中期の儒学者）が並河天民へ送った書簡で、大野家老と伊藤五右衛門のことが記されています。大野は「伴閑精」と称して京都仁和寺の辺りに住み、同年4月6日に衰死し、東山の黒谷に葬られたと書かれているそうです。このことは伊藤五右衛門（大野の弟）が埋葬した日に、夏長兵衛に送った同年4月17日付の礼状にも記述が残っています。赤穂浪士たちが切腹したのが2月4日なので、大野の4月6日の死は47士（46士）の切腹後、約2か月後になります。山形近くの「板谷峠」での浪士達の切腹情報を受けて、大野達16名が自刃し、その情報や遺品が京都に届くまでには時間がかかったとすると、大野達の仇討ち第二予備軍は不思議ではないと考えます。

この話題に類する伝承は「板谷峠」だけでなく、福島県の「庭坂峠」や群馬県の「磯部温泉」の周辺にも似た話が伝わっているそうです。日本人の赤穂事件の関心の高さ、忠臣蔵への人気があったからでしょうか。大野九郎兵衛知房家老が本当に嫌われ者ならば、多くの地に墓や大野達の伝承は残らないのではないのでしょうか。日本人の持つ弱い物への同情的な「判官びいき」なのか、討入りに参加したくても参加出来なかった家臣、また最初から参加しない家臣達の気持ちの代表者が大野九郎兵衛知房に後世の人達の気持ちを重ねたのでしょうか。皆様はどの様に思いますか。

○「仮名手本忠臣蔵」という名前の由来は？

浅野内匠頭の刃傷事件（1701年）から47年後に「人形浄瑠璃」や「歌舞伎」で、『仮名手本忠臣蔵』の演名で1748年（寛延元年）に浄瑠璃を8月に、歌舞伎は12月に上演し、大変好評を得た様です。この「仮名手本忠臣蔵」の上演で「忠臣蔵」や「赤穂事件」に代わる題名として知られるようになったそうです。「仮名手本忠臣蔵」が上演される以前にも、赤穂事件を題材にした歌舞伎・浄瑠璃の演目は多くありました。「忠臣いろは軍記」「粧武者（けわいむしゃ）いろは合戦」「忠臣いろは夜討」等々に「仮名文字」を取り入れています。仮名文字が入っていないのは「豊年永代橋」で、義士達が引き上げる時に渡った橋の名前です。更に「傾城阿佐間曾我（けいせいあさまそが）」は曾我兄弟の仇討ちに掛けているのでしょうか。

「傾城三（けいせいみ）の車」「基盤太平記」「鬼鹿毛無佐志鑑（おにかけむさしあぶみ）」「忠臣金短冊（こがねたんざく）」等多くの作品が上演されましたが、これらの作品を元にして、忠臣蔵ものの集大成が仮名手本忠臣蔵になりました。

「赤穂事件・忠臣蔵」は皆様もご存じの様に吉良は咎めなし、浅野が一方的に悪となり十分な取り調べも無く、即日切腹の判断を出したのは幕府なので、「仮名手本忠臣蔵」以前の多くの作品は直接幕府や吉良悪しと表現出来ないの、遠回しに幕府の裁きを批判する内容で演じられたと思います。事件後47年、約半世紀経過して上演されたのが「仮名手本忠臣蔵」でした。

何故題名の最初に「仮名手本」が付けられたのでしょうか。調査した方の説明を紹介します。赤穂浪士47士達を「いろは」47文字に重ねた様ですが、単なる数字合わせではなかったのです。現代は「あいうえお・・・」ですが、江戸時代は「いろはにほへと・・・」の47文字です。47士と同じ数です。赤文字をつなげると「とがなくてしす」で、濁点を付けると「とがなくてしす」つまり「咎（とが）無くて死す」＝「罪もないのに殺された」の内容です。

ゑ あ や ら よ ち い
 ひ さ ま む た り ろ
 も き け う れ ぬ は
 せ ゆ ふ み そ る に
 す め こ の つ お ほ
 も え お ね わ へ
 し て く な か と

また、「仮名手本」は江戸時代の寺子屋で使う文字の読み書きのお手本でした。江戸時代の庶民は漢字までは読めなくても、仮名は誰でも読めていました。いろは歌として「いろはにほへと・・・」を算数の九九の様に誰でも暗記していた様です。だから江戸庶民には親しみ易く読み易く、連想し易く順番を覚え易いことにつながったのです。「いろは」は物の初め、基本、物事を習う時の手ほどきの代名詞になっていました。

「手本」を「忠臣」に続けて「中臣の手本」との意味、そして大切な物を収納する「蔵」の連想から、「忠義の武士達が多く入っている蔵」と考え、「忠臣蔵」となる発想は素晴らしいことです。「蔵」は忠臣筆頭家老大石内蔵助を、良くやったとの称賛から「蔵」の文字を取り入れたことも、大きな理由であったと思います。

○おわりに

15回にわたり紹介してきました「忠臣蔵・赤穂事件」の内容は、東京都市大学 校友会 川崎支部のある「川崎市」や筆者とも大変「縁」があり、毎年の年末には赤穂事件・忠臣蔵としてテレビや映画が上映され、歌舞伎の世界では「仮名手本忠臣蔵」として、赤穂事件の47年後（1748年・寛延元年）に初上演されてから今日まで約275年と人気がある演目です。この実際にあった事件の真実、脚色された部分、更に話の中にあまり知られていない話、「まったく知らされていなかった謎の話」等々を調査してご紹介しました。

調査を進めるうちに、討入り後に泉岳寺に埋葬された「義士」は47士と聞いていましたが、実は**48士の墓石**が有ります。

また、不忠で末席の家老と言われた大野九郎兵衛知房は、赤穂事件後の赤穂城内での大評定の席で、大石内蔵助と仲違いをしたとされていました。もし大石達が討入りに失敗した時には米沢藩に吉良が向かうであろうと予測し、「板谷峠」で討ちとろうと大野以下16名が待機していました。その結果、大石達が討入りに成功したことを知った16名も切腹したとの話が残っていますが、筆者として信じたい話です。

そうすると、主君浅野内匠頭の為に討入りに参加した家臣達は、**47+1（萱野三平）+16の計64士**となり、主君浅野内匠頭を慕う家臣が多いことと、また家臣達に対する思いやりも多く、主君と家臣との関係が良かったと筆者は感じます。

読まれた皆様はどのように思い、感じましたか。皆様の赤穂事件・忠臣蔵に対する新しい発見や意見を期待します。
(完)

支部の活動

- ① 2022.11.26（土）：エレクトーンサークル sky tone のミニコンサート（夢キャンパス）
- ② 2022.12.17（土）：川崎支部総会+第22回 井戸先生講演会（世田谷キャンパス）
- ③ 2023.02.18（土）：第2回親子で遊ぼう！（アンパンマンミュージアムー参加 1家族1,000円を支援）
- ④ 2023.03.18（土）：お花見（JR津田山駅前 緑ヶ丘公園 噴水前）

ご存じですか

戦国時代、戦の名手と呼ばれた武田信玄は、自らの部下で戦に強い武將を警戒したと言われていいます。なぜなら、**勝ちすぎる武將は相手から恨み**を買うまで戦うからです。それでは永遠にめることは出来ません。八分の価値は危険の兆候で、**九分十分の勝ち**は味方大敗の下地だと、信玄は言ったそうです。**勝ちすぎることは負けることにも等しい**ということでしょう。

私たちよりもはるかに過酷な時代を生き、また実際に多くの実践の中で勝利を積み重ねた戦国武將の言葉であれば、今の私たちにも耳を傾ける価値は、十分にあるのではないのでしょうか。

2023/02/25

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。（連絡先：kawa_matsu51@v00.itscom.net 松本幹事長宛）